
魂【シスコン】～目に入れたらきつと痛いけれどそれでも食べちゃいたいくらい可愛い僕の妹

菜緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹魂【シスコン】く目に入れたらきつと痛いけれどそれでも食べちゃいたいくらい可愛い僕の妹く

【Nコード】

N5859U

【作者名】

菜緒

【あらすじ】

ファンタジーじゃない。ミステリーじゃない。もちろんほのぼのとした学園物でもない。これは一人の優しい男の子が双子の妹のために引き起こした、身も心も冷え冷えとする地獄のような物語である。

「ただ僕は……望んだただだよ」

第一話 解決編（前書き）

不定期ですがよろしくお願いします

第一話 解決編

第一話 解決編

「今、どんな気分だい？」

全てが終わった次の日。

『ヘルプリンガー』こと赤石姫士に学校の屋上に呼び出された僕は――愛沢臨夢――は、フェンス越しに街並みを眺めながらどこからともなく聞こえてくる彼女の声をただ黙って聞いていた。

「最愛の妹が死に、その最愛の妹を死に追いやった犯人を私と力を合わせて倒し、そしてその次の日に『そんな格好』をしているキミの気持ちを、私は今とても知りたいと思っっているんだ」

街を駆け抜けた初夏の風が僕の着ている……元々は妹が着るはずだった紺色の制服のスカートをばたばたとはためかせた。

「長い睫毛、物憂いな表情、透き通る白い肌、艶やかな髪。かつて世にいる全ての男性を魅了した存在。そして今は失われてしまったキミの妹、愛沢望見」

きつと後ろを振り向いたところで彼女の姿はないだろう。あの物語の道理というものを、お約束というものを弁えている彼女が、今更終わってしまった物語の後書きに出演することはまず考えられない。

赤石姫士。

赤い色紙。

赤紙配達人。

ヘルプリンガー。

異端の中の極端。

血塗られた赤き家族の末子。

そんな空前絶後の存在に出会えたこと、そして恐れ多くもそんな彼女と友誼を結んだことは、僕にとって良いことだったのか悪いことだったのか。その辺りのことは全てが終わってしまったこのときを以ってしても全く皆目見当もつかないが、しかしそれでもその偶然の出会いが僕の人生を圧倒的に致命的に決定していったのはまず間違いなかった。

「偶然？　おいおい、キミは何を言っているんだ。決定？　おいおい、キミは何を言っているんだ」

彼女が笑った。いや、声が笑ったような気がしたただだから実際の彼女がどんな顔をしているのかはやっぱり今の僕にはわからない。彼女はいつだって不敵で素敵でやっぱりどこか不適な笑顔を浮かべていて、すでに存在自体が世界の全てを小馬鹿にしているような人だが、それでもこと兄妹という話題に対しての彼女は尋常じゃないくらいに真面目になる。そう、彼女は人外の化け物で超越者であるけれど、その前に一人の少女であり、妹なのだ。

「キミが真犯人なんだろう？」

「……」

すでに日は傾きかけていた。今日の夕日は溶鉱炉の中の溶けた金属のように粘性に富んでいた。そのドロリ、とした赤銅色の光を浴びた街はまるで業火に包まれたかのようで、そしてその光景は否応なしに三年前の記憶を僕に思い出させた。

三年前の、

僕の街と、

世界と、

そして妹の命を奪っていたあの日のことを。

「冗談はやめてくれ」

僕は誰もいない空間に向かって語気強げにそう呟いた。いや、強いて言えば彼女が潜んでいそうな場所——屋上に敷き詰められたブロックに映る僕の影——に向かって呟いたのだが、この際彼女がどこにいるかなんてことはどうでもいい。そう、いくら性格温厚であると自負している僕であっても、すでに深い眠りに付いた妹にこれ以上好き勝手なことを言われるのは我慢できないのだ。

「僕は何もしていない」

愛しい存在。

かけがえのない己の半身。

さすがに目に入れたら痛いけれど、

それでも食べちゃいたいくらい可愛い僕の妹。

そんな大切な人が殺されて、

悲しくて、

苦しくて、

切なくて、

僕は圧倒的に被害者なのに、

それなのにこの結末を招いたのが僕の所為だなんて、

どうして彼女はそんな残酷なことを言えるのだろうか。

「僕はただ——望んだだけだよ」

頭の中で望見が「お兄ちゃん」と呼んだような気がした。

第一話 解決編（後書き）

感想等ありましたらよろしくお願いします。

第二話 終了編 エピソード？（前書き）

好きということは好きと示すことではない。

第二話 終了編 エピソード？

第二話 終了編 エピソード？

好きだったけど、

好きなのに、

好きだから、

好き故に、

好きの末、

好きだった上、

好き過ぎて、

好きが高じて、

好き合っていたからこそ、

僕は妹に「好き」と言ったことがなかった。

その言葉を口にしたら、

全てが終わってしまうことがわかっていたから……

——わからないってことは、ただそれだけでワクワクするよね

妹の望見の口癖だった。そして、この台詞ほど彼女の本質を表している言葉はこの世に存在しないだろう。未知への好奇心。わからないものへの探究心。非日常への羨望。人間であれば誰しもが持っているその感覚を凝縮、洗練した形で所持していた妹は、とにかくわからないものが好きだった。未知なものが好きで、そしてそれが既知となることを心の底から望んでいた人間であった。

——でも、世界で一番わからないのは、お兄ちゃんだよね

妹は血を分けた兄に、しかも双子として生まれてきたこの僕にいつもそんなことを言っていた。お兄ちゃんはわからない。双子なのにわからない。血を分け合ったのにわからない。どうしてお兄ちゃんは女の私より美人なんだろう。どうしてお兄ちゃんは女の私より家事が上手なんだろう。どうしてお兄ちゃんは女の私よりも女々しくて、いつも何か悩んだりしているのだろう。どうしてお兄ちゃんはお兄ちゃんなのに、二卵性なのに私と瓜二つの姿をしているのだろう。わからない。わからない。わからない。

——わからないから、もっともっとお兄ちゃんのことを知りたいよ

望見は笑いながらそう言って、

僕は笑わずその笑顔に背を向けた。

そんなことをすれば最愛の妹の笑顔が曇ってしまうと、

痛いほどわかっていたはずなのに。

「だって仕方ないじゃないか」

血の繋がった兄妹が、しかも双子が愛し合うことなんてあつてはならない。近親相姦なんていう常識も倫理も摂理も破綻した行為は所詮空想の物語の中だけの話なのだ……などと、そんなくだらない屁理屈を捏ねるつもりは毛頭ない。だって大前提として僕は妹を、愛沢望見という存在をこよなく愛している、余すことなく愛しているのだ。もちろんそこには加減もなければ限度もない。だからこそ、本来僕がこの場で二の足を踏む必要なんて、必然なんてあるはずがないのだが……

「愛する人と共にあるが故に地獄のような日々を歩むなんて、そんな屈辱的なこと僕にできるはずがない」

わからないからワクワクする。

望見の場合それが極端過ぎて、

極端から突き抜けすぎていて、

『ワンダーインリアルワールド』

“日常の中の非日常”と呼ばれ世界に恐れられるまでになってしまったけれど、

それは何も望見だけの特権ではないのだ。

わからないからワクワクする。未知のものに挑戦するのは楽しい。そもそも人生というものを道に例えるなら、その道は本来迷路のようなものであるはずだ。どちらに行ったら良いかわからない。何を選択するべきなのかわからない。右か左か。成功と失敗。一寸先は闇で、何もかもが手探りの状態。しかしそれでも、いや、それだからこそ人生は楽しい。それだからこそ生きていく意味があるのだ。初めてやるロールプレイングゲームで最初から攻略本を片手にしてプレイすることのどこが楽しいというのだ。

わからないことがある。間違えて、失敗して傷付いたり、傷付けたりすることがある。そしてそれらに恐怖心を抱くこともある。けれど、それこそが人生の本質だ。それこそが生きているということなのだ。もしもわからないことが何もなく、間違えたり傷付いたり恐怖を感じない人生があるのだとしたら、全てが坦々と淡々と進んでいき変わり映えのない予定調和のような日々が続いていく人生があるのだとしたら、それは、それは地獄以外の何物でもない。そして、少なくとも僕はそんな何の新鮮味もない全てが予測できてしまう人生は歩みたくないし、それが愛する者と一緒にあるが故だとしたら尚更のことだ。

つまり、

僕には見えてしまったのだ。

よりにもよって、

妹と結ばれた先にある、

何の変哲もないただの一本道が。

ゾツとした。愕然とした。唾然とした。懔然とした。気づいた瞬間に、すぐさま死にたいと思った。生まれたときから隣には最愛の人がいて、その人は幸運なことに僕のこともとても愛してくれていて、それなのに、それ故に、その彼女と歩んでいくだろう人生がこどもはつきりと克明に、鮮明にわかってしまうなんて、そんなひどい話があるか。

僕には手に取るようにわかる。

このまま妹の熱烈な求愛に答えてしまったら、

好き好き好き好き、愛してる。

そんな陳腐な台詞を毎日ダラダラと、

それこそ死ぬまで続けていくだけなのだと。

心躍る新たな出来事や、

二人で苦難を乗り越えてさらに絆を深めることや、

わからないことがわかるようになることは、

今後絶対にありえないということを。

「だから僕は逃げたんだ」

汚い敗走だったのかもしれない。

醜い逃亡だったのかもしれない。

でも僕自身は名誉の逃走だと、

そう信じ込ませていた……

第二話 終了編 エピソード？（後書き）

感想等ありましたいつでもどうぞ。

第三話 終了編 エピソード？（前書き）

先に死んでごめんなさい。

第三話 終了編 エピソード？

パチパチ

本来静を旨とする真夜中の住宅街に何かが弾ける不規則な音が鳴り響く。音は大小様々で、その聴覚的要素から音の発生源が遠近区々だということがわかった。住宅街という場所を考慮すれば昼間でさえその音は異質と認知されるもので、人々が寝静まるこのときであればそれは尚更のこと。さらにその異質さに拍車をかけるのは辺りの異常なまでの明るさだった。現在の時刻は深夜の一時を回っていて、普段であれば闇の中にある光は空に浮かぶ星か夜道を照らす街灯。あとは精々夜更かしをしている人々がいる家くらいだろう。しかし、今は違う。今は日常と全てが違う。音のことも明るさのことも、そして……

「望見いいいいいい！！！！」

一番の違いは、僕たち愛沢兄妹の周りが真っ赤に燃え上がっているということに他ならなかった。僕たちの家を中心として、およそ半径二百メートルの建造物は全て火の海に飲み込まれていた。しかも住居はただ燃えている……いや、燃やされていたわけではなく、徹底的なまでに破壊された後に火を放たれていた。

およそ四十軒の住居を一夜にして破壊、そして燃やす。それは凡

人には不可能、とまではいかにせよそこに近い領域の行為だろう。と、同時にそれはたとえできたとしても態々やるうとは思わな
い行為だ。しかしそれが目の前で巻き起こされていたという事実は、
実際のところ僕にとって何の意味もなかった。確かに近所の人達に
はそれなりによくしてもらっていたし、その中には仲の良いクラス
メイトもいた。その人たちがおそらく死んでしまったのだろうと考
えると、それなりに悲しい思いが胸の中から込み上げてくるし、さ
らに冷静に考えると、普通の人間なら先に述べたようにできたとし
てもあらゆる意味で労力がかかりすぎるこのような行為を行うはず
がない——つまり、それは自動的にこの許されざる行為を行った何
者かは少なくとも普通の人間ではないということを意味している。
その普通の人間ではない何者かが、今も僕たちの近くにいるという
可能性は決して否定することはできないのだ。

そう、冷静に考えれば怖いのだ。冷静に思考を巡らせれば、何の
力も持たない僕は今すぐこの場から逃げなければならぬのだ。
冷静に、

レイセイに、

れいせい……に、

「お、に……ち………ん」

——ドクンドクン

固い瓦礫の上で仰向けに倒れている所為か、口内に大量の水分が溜まってしまっている望見はとも喋りにくそうだった。僕はその望見の呼びかけにあえて答えないで、その代わりに彼女の自慢の長い髪を優しく梳いてあげた。彼女は少し恥ずかしそうに顔を青ざめ

させたが、すぐに息苦しくなつて体を盛大に震わせて咳き込んでしまった。

僕の顔に多量の血が付いた。

それを見た望見は小さく、本当に小さく、僅かに唇を動かしてごめんね、と……もちろん僕はその言葉に否定の意を込めて首をゆつくりと横に振った。当たり前だ。愛する人の、妹の、愛沢望見の鮮血なのだ。僕にとってその一滴は聖水よりも清く、神よりも尊い物。嫌に思うはずがない。

望見はもう死にそうで、正直言つて助かる見込みなど皆無だった。だからより正確に表現するのならば死にそうなのではなく、たった今この瞬間に望見は死んでいつていると言つた方が正しかった。完了ではなく進行形で死んでいて、もうすぐ過去形で死んだと言われちゃうほどの状態。その状態の最たる原因だと思われる傷は、白のネグリジェの純白を紅く染め上げることでのその位置を示していた。兄という身内の立場の僕がいくら誇大に評価して見たとしても決して大きいとは言えない望見の未成熟な胸部。そこを左上から右下にかけて走る太い血の線は今もその範囲を着実に広げていた。傷から流れる夥しい量の血液は傷の大きさを物語っていると同時に、最悪のシナリオも物語っていたのは言うまでもない。あまりにも血の量が多いので直接その傷口の深さを視認することはできないが、この血の泉を見た者であれば誰もが衣の下に酷い致命傷があることを想像できるだろう……本当はそんな醜惡な想像など微塵もしたくないのだけだ。

しかし、皮肉（皮肉という言葉が皮と肉という字を使うのがまた忌々しいことだ）なもので、その傷の深さのおかげで血溜まりの底にある生々しい臓器を見ないで済んだことは、おそらく僕にとつては大きな幸運であつたのだろう。もしも傷口が見えてしまつていたら、僕はとてもじゃないが耐えられなかったと思うし、妹の死に目

で取り乱していたりしたら、それはもう本当に取り返しの付かないことになっていた。大きな幸運。望見が死ぬのは最低最悪の事態であることは全く揺るぐことはないが、世界には中の上という表現の仕方があるように、最低の中の最高という状況もごく稀に存在することがあるのだ……それも僕としては大いに忌々しいところだが。

「あ、あ……うう……ああ」

望見がゆつくりと手を真上に伸ばして何かを探し始めた。多量の出血で目が霞んでいるようで、しばらく力無い手は宙を彷徨っていました。その手が僕の顔に触れると彼女はにつこりと笑い、顔に付いている血を塗りたくるように頬を撫で回した。

ああ、

今、僕の肌に望見の血が、

妹の生きていた証が刻み込まれていく。

僕にとって何よりもどんなものよりも価値あるものが、

愛する人の手により刷り込まれていく。

「お、に……ゴホゴホ、うああああ」

また……咳き込んだ。しかも今度はほとんど血が出ないで、乾いた咳だけが深夜の炎場に響き渡った。さらに望見の血で生温かかった手が、急激に冷たくなっていくのを僕の肌は鮮明に感じ取った。僕は恐怖した。恐怖し狼狽し、最終的に僕は望見の前で涙を流すという痴態醜態を晒してしまった。そう、僕は初めて望見の前で泣い

ただ。兄は妹の前で泣いてはいけないのに、僕は望見の前では泣くまいと決心していたのに泣いてしまったのだ。流れ落ちた涙が望見の頬に落ちて弾け飛ぶのを見ると、それだけでまた望見の体温が奪われていくようで、だから必死に涙を止めようと思ったけれど、すでにここまで感情の波が押し寄せてきてしまうと、もうそれを自分で制御することなどできなかった。

ここは、

ここは、謝った方が良かったらどうか。

こんな、こんな兄で申し訳なかった、と。

「さ、きに……しん、で……ごめ……」

——先に死んでごめんなさい

ああ……嗚呼……もういいだろう愛沢臨夢。もう十分だろう。もう退屈な未来の所為にするのはやめにしよう。目の前の双子の妹である前に一人の少女である愛沢望見が、自分の死を前にして自分の苦しみを謝っているのだ。それに、その途方もない狂気すら軽々凌駕した愛に、心が震えないはずがないじゃないか。もう迷う必要なんてこれっぽっちもないじゃないか。大切な者はいつだって唯一つ。それだけあれば、いや、それさえなければ僕はここまで生きてこなかったんじゃないか。

望見こそ僕の全価値だ。こんな最悪な結末を迎えてからでしか決心できない自分がほとほと嫌になるが、それでも決心したからには……もう迷わない。迷うことは許されない。

「望見……ねえ、望見。苦しいだろうけど目を開けて。僕さ、初め

て言うけど、望見のこと大好きなんだよ。すっげえ好きなんだ。陳腐でありふれた言葉だけど、妹として家族として女として人間として存在として僕はお前のことが世界で一番好きなんだよ」

「うあ、あ、ああ、んむ！」

望見は僕の告白を聞いて驚き、呆け、そしてすぐに泣き始めてしまったが、残念ながら僕はそこで攻めの手を緩めるような優しい兄ではなかった。先程まで荒い息遣いをしていた、しかし今はただ少量の空気が漏れているだけの唇。呼吸することすら難しい瀕死の重傷を負っている人間にそのような行為をすれば死期を早めるだけだということとは誰の目にも明らかだ。もちろん僕だって望見には一分一秒でも長く生きていて欲しいと願っている。でも十三年間抱き続け隠し続けた想いは止められない……ということ、さて望見が十三年間守ってきたものを一つずつ奪っていくとしよう。

「ぴちゃぴちゃ、ちゅるるる……んはあ！」

実妹との濃厚な接吻

禁断の果実は何となく感覚として甘酸っぱさを予想していた。何といっても果実なのだから。しかし、実際口の中を支配したのは粘性に富んだ血の味で、お世辞にも美味しいものではなかった。ただ、それでも口を介して流れ込んでくる鉄の味を僕は堪能し、そして吸血鬼の如く夢中になって血を吸い続けた。

——ドクン、ドクン

「のぞみい、好きだよ、愛してるよ」

望見の血を飲んでいると考えただけで、自分がどんどん猛ってい

くのがわかった。鼓動は先ほどから五月蠅いくらい大きく聞こえていて、下半身は節操なく張り詰めてしまっていた。頭がボーっとする。妹の血。望見の血。最愛の人が生きていた証。それを全て自分が奪っている。望見を自分の物の如く好き勝手に蹂躪している。そしてそれを望見が余すことなく受け止めてくれている。必死……必ず死ぬと頭で理解しているはずなのに、最期の最後まで口を離して呼吸をしようとしないう望見。愛している。けれどそれ以上に愛されている。心が震えた。奥底の方から震えた。それが尋常ならざる愛への歓喜の為なのか、それとも刹那の後に訪れる妹の死という絶望の為なのかは分からない。そもそも冷静な判断など、この事態に陥った時から放棄してしまっていたため、僕の頭の中は全てのことにあやふやで曖昧なのだ。そのような僕に良識と真実と節度という概念を理解できるはずがない。ない。ない。ないのだが、それでも僕はもう迷わないと決めた。決めたんだ。神を差し置いて、妹の前で跪き心を決めたのだ。

たとえばそれがどんなに非道な行為を含もうとも、

たとえばそれがどんなに激しい痛みを伴うとしても、

たとえばそれがどんなに非倫理的・道德的であつたとしても、

たとえば

たとえば

たとえば

たとえば

どんなに

どんなに

どんなに

どんなに

——ヒドウデゲドウデイタクテクルシクテリンリヤドウトク
ガハタンシテシマツタトシテモ

ボクハキメタ。

ユエニマヨワナイ。

その日僕は妹を殺しました。

この唇で。

第三話 終了編 エピソード？（後書き）

感想等ありましたらいつでもどうぞ。

第四話 終了編 ポストリユード（前書き）

どーっ
ちだ

第四話 終了編 ポストリユード

……

……

……パチパチ

「おそらくこの所業、悪行の犯人は上級の妖魔だね。この辺りにまだ力の残滓が色濃く残っているのを感じるよ……まあ上級と言ってもやっていることの無意味さを鑑みると頭の方は幾分か弱そうだけどね。ふう、それでも私も適当に遊んでいた仕事を早急に片付けて駆けつけてきたのだけれど、さすがは上級、逃げ足だけは速かったか」

「……」

「さて……それではまずあまり興味が無いかもしれないけれど一応報告しておくよ。この半径二百メートル以内で原形を留めている『モノ』はキミ達だけだ。他の人達は死んでいた、いや、その表現は間違いではないのだけれど、その事実は揺るぎのない真実なのだけれど、それでも犯人の異質性を際立たせてキミを驚かせたいと思う私がそれをより一層仰々しく表現するならば、そうだね、ご近所さんは完膚なきまでに消されていたよ。跡形も影すらも残さずにね。あははは、こんなとき自分を偽れない自分がとことん異端だと思ふよ。笑いが止まらない。楽しくてたまらない。悲劇のヒーローとヒロインを目の当たりにして笑うことが不謹慎極まりないことは知識だけではなく心から、私の小さな胸よりもさらに微小な心の奥

底から理解しているんだ。理解しているが……クツクツク、やはり私は泣けないよ。笑うしかできないよ。笑って『運が良かったね』と皮肉することしかできない。不幸中の幸い、最低最悪の中の最高を皮肉することしかね」

「……」

「皮と肉の話はまたすぐ後にするから今はこのくらいにしておいて話を変えようか。むふふふ、とか今度は含み笑いをしたらいいのかな。とうとうキミ達もキスをしていちゃつくようになったかと思うと、実に感慨深いものが私の内に渦巻くよ。しかもシチュエーションが『兄が妹を殺める。ただしキスで窒息死、みたいなの！』なんてすぐロマンティック。んゝゾクゾクするね。私ももしお兄ちゃん……って考えると色々な所が濡れてきちゃうかもしれないな」

「……」

「反応が薄くてつまらないねー。まさかこの事態に少なからず動揺しているのかい？ 確かキミ達兄妹には世の中には『こんな』こともあるということと言ったことがあるはずだけど……やはり所詮は表の世界の人間だったということなのかな。異常に慣れることはない、異端と相容れることはない、そしてなにより私達のように異物を排除することができない。残念だよ。至極残念だ。私がキミ達に絶大な期待をしていると言ったことがあっただろ？ キミ達はそれを化け物の戯言か妄言だと思っていたかもしれない。でも私は本気なんだ。愛沢兄妹がその全てを見届ける価値がある最高に楽しい存在だということを私は妄信している。それはさながら怪しい新興宗教の信者のようにね。だから——信じているからこそキミに問うことにするよ。ここからの話は冗談抜きだ。先程からの沈黙は動揺や後悔の所為という至って普通の人間らしい心の発露なのか、それとも禁断の一線を越えたことによる歓喜や興奮がキミの言語機能を一時的に奪ってしまったのか、はたまた私の期待を十全以上に応える他の何かがあるのか。私の悪い癖で前フリがこれ以上長くなってしまうと困るからそれでは聞くんよ——」

「×××××？」

その問いに僕は、

『僕たち』は――

第五話 再開編（前書き）

罪悪感が生きる糧です

第五話 再開編

第五話 再開編

幼少期から天才の名をほしいままにしてきた僕だけど、そんな僕でも苦手なものがいくつかあった。

一つは妹。ただこれは完全に惚れた弱みというか、性格というか、運命に近いものだからさして僕自身は気にしていなかった。

一つは赤い色。ただこれは完全にあの人を、あの異端者を彷彿させるからであって、正確に言えば僕が苦手になっているのは色ではなくあの小さなお姫様だった。そして常識と摂理と世界を蹂躪してキヤッキヤと喜ぶあの人のことを苦手としていても、僕のプライドは何一つ傷付くことはないのです、そのことも僕自身はあまり気にはしていなかった。

そして、最後の一つ。

しかし、これだけは先の二つとは全く異なり、純粹に、本当に他の猪口才な理由が混じる余地すらないほど純然にそれそのものが苦手だった。

苦手というか、

自然に拒絶してしまうのだ。

それは僕の身体、精神には合わない。

それは僕の主義、流儀に沿わない。

それは僕の人生、運命に当てはまらない。

なにより、

あの日、

あの時、

あの場所で、

僕は決意したのだから……

……

……

……

「カラスって奴は今でこそ不吉の象徴だが、ちよいと歴史の紐を解いてみればなんと奴らは神の使いと崇められていたことがあるということをお前は知ってたか？」

平和過ぎて鳩が豆鉄砲の存在を忘れてしまいそうな日の昼休み。

他のクラスメートはすでに校庭に出て遊んだり、教室内で友達とお喋りをしたりなど自由な時間を謳歌していたが、僕だけは自分の席から離れず、目の前のものをただ凝視していた。

「日本では古来、カラスは吉兆を示す鳥だった。外国でもカラスはその黒い焦げたような容姿から太陽と深く関係しているものと見なされ、神聖視されていたようだ。ただ、まあご存知のとおり実際のカラスはあの容姿で、ずる賢くて、しかも雑食性。死肉はもちろんのこと、一部の種じゃ共食いまでするらしい。まったく……生きるためとはいえ同属を食うなんて考えられネエよな」

「食人だって歴史を紐解けばかなりの数行われているよ。かの有名な『ロビンソンクルーソー』にも食人する人達は出てくるしね。まあ、人間の場合は純粋な食料として人間を食うことは稀で、そこには大抵緊急性や儀式性、あと一部には性的嗜好も関わっているらしいけど」

「緊急性に儀式性に性的嗜好ねえ……確かにそう言われればいくつかが聞いたことがあるな。しかし、じゃあ仮に俺たちが牛や豚を食うための家畜として扱っているように、人間を家畜のように認識している人間——お前が言う『純粋な食料として人間を食う』存在——がいるとしたら、いったいソイツは何者なんだろうな」

「何を言ってるんだキミは。そんな存在はすでに『人間』じゃない、立派な化け物だよ」

「ははは、そうだな。そりゃあちげえねえわ」

にゅつ、と。

饒舌に話していたその男——金髪で深い緑色のサングラス、そして素肌の上に直接白のワイシャツという奇抜な少年——は、僕の目の前に置いてあった皿に手を伸ばし、そこにあった今日の給食の献立だった『若鶏の香草焼き』を一掴みすると、大きく口を開けそれ

を頼張った。

「午後の授業は体育だ。ただでさえお前は木村教諭に目を付けられてるんだから、早めにグラウンドに出てろよ」

空になったお皿を掴んだ男は、そのまま足早に教室を去っていた。

「ふう……やれやれ、ようやく地獄のような時間が終わったか」

そう独り言を言いながら素早く自分の箸を片付ける。中学三年生にもなつて昼休みに給食の居残りをさせられるとは甚だ情けないことであると、自分でもそれは大いに自覚していることではあるのだが、しかしこればかりはどうしようもなかった。

菜食主義。

偏食主義。

非肉食主義。

そう、

僕は肉を食べられないのだ。

「助けてもらっている身で言うのも変だけど、彼も給食委員長とはいえ、献立に肉がある度に僕のところに来てくれるなんて相当仕事熱心だよな」

箸筒と敷いていたふきを薄い水色の給食袋に仕舞い、中途半端

に消された数式が残る黒板の上に掛かった時計を見上げた。時刻は十二時三十分を少し回ったところ。

「次の体育の授業開始まではおよそ十五分、か……」

教室内を見回すと、外に遊びに行かなかった男達も徐々に着替えを始めていた。ある者は隠れるように、ある者は隠すように、ある強者は何故かトランクス一枚で仁王立ちをしていて、さらにある者はトランクスにまで手をかけていた。熱帯地方に降るスコールのように突如無法地帯になった教室内では、女子たちの悲鳴と怒声が巻き起こり、野獣と化した男たちは脅えるそんな彼女たちを面白がつてさらに追い回していた。

「……まあ、先にトイレに行っておいた方が安全かな」

脳内で危険信号が鳴り響いていたので、給食袋を机の横の金具に引っ掛けた僕は、教室を静かに出ることにした。少し離れた位置にある男子トイレに向かって廊下を歩いていると、涙目をしながら僕の横をすり抜けていく女子が何人もいて、彼女たちが通り過ぎた後、背後にある我が教室からは勝利と歓喜の雄叫びが聞こえてきた。しかし残念なことに、僕の頭脳を以ってしても彼らが一体何と戦って、何に勝利したのかはわからなかった。たぶん一生わからないのだろう。そして、わからないということはそれだけでワクワクすることだった。

「今日も暑くなりそうだなあ」

全開になっている廊下の窓から空を見上げると、初夏の太陽が木々を、空気を、校舎を熱く焦がしていた。決して心地良いものではない熱気を含んだ風が僕の腰まである長い黒髪を揺らすと、しかし

それでも感慨深いものがこみ上げてきた。

また、夏が来た。

妹が、

望見が好きな夏。

そして、

望見が死んでから三度目の夏。

あれから髪の毛を長く伸ばして、今ではあの夜の望見と同じくらの長さにはなっている。肌もあのときの望見の美しさを再現するため、なるべく日に焼けないように気をつけて、スキンケアもしっかりしている。身体も余分な贅肉はもちろんのこと、筋肉がつきすぎないようにするため、五歳のときからずっとやってきたサッカーをやめた。そのおかげかはわからないけれど、今の僕の身体は女子のように華奢だった。

正直言ってそれが意味のある行動とは自分でも思わない。

長い髪は暑くて鬱陶しいし、

その長い髪と望見と瓜二つの女顔の所為で、男気溢れる体育教師の木村には目を付けられるし、

なによりそんな『まるでまだ愛沢望見という存在が生きているように見せることが、とんでもない独り善がりな自己満足である』ということは自分でもわかっている。

だけど、

だけど、それはやはりやらなければいけないことだった。

だって僕と望見は双子だから。

双子は二人で一つの存在だから。

僕だけが一人のうのうと生きていて良いはずがないのだ。

(――!!)

「ま、過去のことをいつまでも引きずっていてもしょうがないのは僕も重々承知してるよ」

死んでしまった兄想いの妹に弁解をした僕は、体育の時間が差し迫っていることを思い出し、止まっていた足を再度動かした。そして、男子トイレに入った僕は左手に並んでいる便器には向かわず、右手の手洗い場の前に立ち、学生ズボンの中から黄色い髪留めのゴムを取り出した。髪が引つ張られて頭が痛くなるから髪を纏めるのは好きじゃないのだが、以前一回体育教師の木村に「結ばないなら切って来い!!」と注意されたので、それ以来体育の前はこうしてしっかりと髪の毛を纏めるようにしているのだ。

髪留めを口に咥えて、鏡を見ながらまず後ろの髪をしっかりと束ねる。これくらいなら鏡が無くてもできると思うかもしれないが、木村の奴は少しでも髪が漏れていようものならたちまち食いついてくるハイエナなので、これでもかというくらい慎重に髪の毛を集めてまず簡単にポニーテールにする。しかし、それでも後ろに長く垂れてしまっているの、そのままその髪を折り返して持ち上げ、ヘアクリップでしっかりと固定する。

「これってポニーというよりもリスの尻尾だよな」

(——っ)

頭の中で望見が大好きだったミスタードーナツのハニーシッポを思い浮かべてしまい、柄にもなく僕は笑ってしまった。そして鏡の中では望見とそっくりな顔が笑っていて、さらにその背後には……

「……キミたちはさっきから何をしているんだ？」

鏡越しに見える数人の男子生徒たち。明らかに用を足し終えている彼らであったが、しかし何故か彼らは用便器の前から微動だにせずただその場でじっと立ち尽くしていた。

全員が全員、

己を恥じるような顔をしながら……

「さつさとそのいきり立った逸物を鎮めて教室に戻ったらどうだい？」

煩惱と色欲に塗れ、節操なく欲情する彼らに冷たくそう一言言い放って、僕は男子トイレを後にして教室に戻ることにした。背後からは「あのうなじはヤバイ!!」「何故俺は前屈みになった男の胸元を覗こうとしたんだ!!」「治まれ!!俺のプライドにかけて治まってくれ!!息子よ!!」などとあらゆる意味で敗北を喫した男たちの嘆きの声が上がっていた。

第五話 再開編（後書き）

着地地点未だ不明。

しかしなんとか書き上げますので、感想等ございましたらよろしく
お願いします。

第六話 再会編 因果（前書き）

偶然の最上級は必然

必然の繰り返しは偶然

当然といえば当然ですけど

第六話 再会編 因果

第六話 再会編 因果

「でも私は本気、本気なんだ。愛沢兄妹がその全てを見届ける価値がある最高に楽しい存在だということを私は妄信している。それはさながら怪しい新興宗教の信者のようにね。だから——信じているからこそキミに問うことにするよ。ここからの話は冗談抜きだ。先程からの沈黙は動揺や後悔の所為という至って普通の人間らしい心の発露なのか、それとも禁断の一線を越えたことによる歓喜や興奮がキミの言語機能を一時的に奪ってしまったのか、はたまた私の期待を十全以上に応える他の何かがあるのか。私の悪い癖で前フリがこれ以上長くなってしまおうと困るからそれでは聞くよ——」

——アタラシイセカイハドウダイ？

その問いに僕は、

『僕たち』は——

.....

.....

.....

（――）

「ははは、結局先に着替えても後に着替えてもここは地獄だったね」

教室に戻るとすでに男子は着替え終わっていて誰もいなかった：

「が、しかしさすがはがさつな男どもと言っべきか、脱いだものは自分の机の上に丸めて捏ねてあるだけで、教室の窓も開けっ放しになっていた。せつかく『筋肉祭』全ては筋肉の赴くままに』なる意味不明な狂乱を避けたのに、こんな『筋肉祭』乳酸地獄につき疲労困憊』みたいな光景に出会うなんてまったく付いていないとしか言いようがない。というか、なぜトランクスマで脱いであるんだ。体育だからボクサーパンツに履き替えたのか、それとも……」

「いや、その想像は誰一人幸せにできないからやめておこう」

（――！！）

などと言いつつ、ちょっとだけ誰とも知らない男子の短パンの下を想像してしまった。頭が痛かった。確かに僕は幼いときから天才の名をほしいままにしてきたが、逆に理論も理屈も無視した行動には滅法弱かった。

「まあ、だからこそ僕は天真爛漫な望見が、そしてあの人が苦手な

「んだらうな」

冷静にそう自分のことを判断しながら荒れ果てた戦場の中にある聖域のような場所（自分の席）まで歩いていった僕は、給食袋が掛かっている方とは反対側の金具から体育着の入った紙袋を取り、それを机の上に置いた。着ていたワイシャツとその下の黒のタンクトップを脱いだ僕は、もちろんそれらをきちんとたたんで机の上に重ねて置いた。そして、ちょうど体育着を着ようと手を伸ばしたとき、開けっ放しになっていた窓から少し強めの風が吹き込み、少し垂れていた前髪がふわっと舞い上がった。僕は体育着を掴もうとしていた手を一旦引っ込め、前髪を弄んだ初夏の風がやってきた窓の外をまた何となく見ようと、体を動かす――

ガタッ

「ひゃあ！」

誰もいないはずの教室に奇声と物音が響き渡った。僕は窓の外からすぐさま音源の方に視線を向けた。すると教室の後ろ、掃除用具が入っているロッカーの付近の床に、一人の女の子が膝を抱えながら座り込んでいた。

「いたたたた……」

「……」

「脛打ったあ……」

「……上郷さん？」

「え、あ……」

突然現れたクラスメイトにどうしていいかわからず、普段あまり話したことはなかったがとりあえず声をかけてみた。しかし、上郷

飛鳥さん——特にクラスの女子の中でも目立つ存在ではないけれど、その長く艶やかな黒髪には定評がある——は、僕の言葉を聞いても体育着、紺色の短パンという格好でその場に座り込んだままで何も喋ってくれなかった。それどころか声をかけた所為か、体が少し震えていた。僕も急な出来事だったのでそんな彼女の姿を見て「僕のこと怖いのだろうか」などと真剣に悩んでしまったが、すぐに今自分が上半身裸であることを思い出した。僕にしてはあらゆる意味で迂闊だった。そもそも二人っきりの教室で裸の男と一緒にいたら怖いに決まっているだろう。自分の行動の軽率さと注意力不足を恥じながらも、とりあえずすぐに体育着を着込んで僕は上郷さんの下へ歩み寄った。

「見苦しい姿を見せてごめん。人がいるなんて知らなかったから」

なるべく優しい声で、そして笑顔で僕は再び声をかけた。三年生に進級してから早三ヶ月。近くで彼女の顔を見るのは恐らくこれが初めてだろうが、それにしても彼女の顔はあまり印象に残っていなかった。ただ、印象に残っていないからといって、これからまだ半年以上一緒に生活をしていく仲間だ。これから平穏な学校生活をしていくためには、ここは一先ず謝り倒した方がいいだろう。

平穏。

平和。

それはなによりも尊いものなのだから。

「不快な思いをさせちゃったよね。本当にごめん」

「そ、そんなに謝らないで下さい。私、教室にお財布を忘れちゃって、そのままでも大丈夫かなって思ったんですけど、やっぱり不安

になつて、だから取りに来たんですけど、急に愛沢君が来ちゃつて、びっくりしたから隠れちゃつて、そのままそつと出て行こうと思つたんですけど、愛沢君の着替えてる姿が見えちゃつて、綺麗だなあつて見とれていたら、ああ私、何覗きみたいな事をしているんだろうつて急に思つて、パニックになつて飛び出た椅子に足をぶつけちゃつて、それで――」

何故か慌てた彼女はマシングンのように事情を説明し始めた。身振り手振りを駆使し、時折声を裏返してしまうその姿はなんだか可笑しくて、そして少し可愛かつた。

（――！！）

場違いにも和んでしまつていた僕だったが、突如襲つてきた頭痛によつて我に返つた。そうだ、こんなことをしている場合じゃなかつた。

「上郷さん、とりあえず落ち着いて。ほら、時間はいいの？　女子は体育館だから時間がかかるでしょ？」

「え、ああ！　そうでした！！」

今度は僕の言葉に反応した上郷さんは大声を上げて立ち上がり、そのまま走つて教室を出て行つた。床には可愛らしい小鳥の絵が描いてあるお財布が寂しそうに落ちていた。僕はそれを拾い上げて彼女の席まで持つていき、ちよつと迷つた拳句彼女の机の中に入れておくことにした。

（――）
「くっ……」

再び襲う頭痛。警鐘の代わりのようなその痛みに急かされて教室の時計を見れば、授業開始まであと三分しかなかった。まずい、これはまずい。ということで急いで黒の学生ズボンを脱ぎ、体育用の紺色のサッカーパンツを履いた僕は、さらにその上から日焼け防止用のジャージを羽織った。夏の体育でジャージなど本来不要ではないのだが、これだけはやはり譲れないところだ。

イレギュラーなことがあったが、ようやく全ての支度を済ませた僕は、急いで教室を出ようとした。しかし、出る直前になってそういえば窓を閉め忘れたことを思い出し、慌てて教室の入り口で振り返った。振り返った。振り返ってしまった。

己の後ろを、

人生を、

過去を、

振り返ることが無意味であるということを、僕は知っていたはずなのに……

「出会いはいつも偶然で、別れはいつも必然で、再会はいつも突然だ。そうは思わないかな、我が親愛なる友人愛沢臨夢くん？」

第六話 再会編 因果（後書き）

遅筆でごめんなさい。それでも日々邁進していきますのでどうぞよろしく願います。

第七話 再会編 因縁（前書き）

間違いは間違ったことに意義がある。

第七話 再会編 因縁

第七話 再会編 因縁

「For example」

たとえば、と、突如目の前に現れた小さな少女は語り始めた。

「非科学的だとか、科学的にありえないという言葉が近代以降世界の全てを支配してきたことは言うまでもないことだけれど、では果たしてそれは正しいことなのだろうか。科学的に正しいことは全てにおいて正しいし、科学的におかしいことは総てにおいて誤っている。1 + 1 は必ず2であり、1 + 1 = 田んぼ『田』の字になるなんてことは奇怪な謎かけ以外ではありえない。そんな単純な二元論でこの複雑怪奇天国地獄の曖昧模糊未知クンの世界を語ることなど、本当に出来ることなのだろうか。いや……これはそもそも可能不可能な話なんかじゃなくて、そんな致命的で最終的なことよりも遥か前段階にある、そう、つまり前提のお話。世界を語るとき、まず初めに二元論で語ろうとするかしないかという、ただそれだけの話」

近所の神社の境内で身の丈4メートル以上の、一見すると猫のような……しかし、明らかに通常のそれよりもおぞましき外見をした正体不明な『何か』に襲われた双子の兄妹。何が起きたのかわからず、目の前にいるものが何者かわからず、そして何をしたらいいのかわからない僕たちに対して、その小さな女の子は

科学的にも

生物的にも

物理的にも

数学的にも

倫理的にも

常識的にも

社会的にも

存在的にも間違っている笑みを浮かべていた。

「私は、正しいと思うよ」

ストーン

どこからともなく現れた小ぶりのナイフを左右の手に握り締めていた女の子は、

数分後、

身の丈4メートル以上の化け物——後に『妖魔』という存在だと知る——を百と八つに解体していた。

「科学的に正しいことは常に正しい。科学的におかしいことは絶対に間違っている。だけど——」

——この世界には歴然として間違いも存在しているんだよ

紅蓮の髪の毛を持ち、

それ以上に返り血で全身を真っ赤に染め上げた少女。

赤石姫土。

赤い色紙。

赤紙配達人。

ヘルプリンガー。

異端の中の極端。

血塗られた赤き家族の末子。

それが彼女との初めての回合だった。

……

……

……

開いていた教室の窓。その窓枠に凶悪で巨悪な笑顔を浮かべた人間が……いや、人間の形を模した別次元の存在がそこに座っていた。その姿はこの僕をして完璧だと思わせた三年前よりもさらに圧倒的で、反面、超絶的に何かが欠けていた。人間的な何かがおかしいくらい足りなかった。

そもそもは世界に生まれた間違いを狩る存在であり、しかし時を経るごとに徐々に己が間違った存在と化していった彼女たち。

裏の世界。

間違った世界。

異端の中の極端の世界。

そんな人外の化け物を狩る人外たちの世界を治めている五つの母家『赤石』『石神』『埋宮』『衛士』『押切』。その中でも最高にして最高峰の『赤石』——“零流”“血塗られた赤き家族”“終わりの始祖”の末娘。

——しかし、じゃあ仮に俺たちが牛や豚を食すための家畜として扱っているように、人間を家畜のように認識している人間——お前が言う『純粋な食料として人間を食う』存在——がいるとしたら、いったいソイツは何者なんだろうな。

給食委員長。

キミが同じ問いを何度しようとも、僕はきつと同じ答えを出し続けるよ。

そんな存在はすでに『人間』じゃない。

ソイツは、

目の前にいる赤い彼女は間違いなく化け物だ。

そして、

間違いなく次の授業はサボりだろう。

「容姿端麗頭脳明晰の臨夢クン。運動神経抜群で世界なんて甘っちょろくて両目を瞑ってでも難なく完璧にやり通してしまう臨夢クン。冷静で何事にも動じず私以外の誰にも妹が好きで、狂おしいほど愛していることを洩らさない臨夢クン。振り向いたところに私がいたくらいでそんなに驚いた顔をしないほしいな。私は影。私は闇。いくら臨夢クンが平和で平穩の生活で光を全身に浴びてようと、そこに影さえ出来れば、私はいつだって臨夢クンの近くに現れることができるんだよ。あ、そうそう、臨夢クン。相変わらず前フリが長くて危つく言つのを忘れてしまふところだったけれど……久しぶりだね」

「……」

「あれ？ 『はなす』 ↓ 『しかし、ただのしかばねだった』 的な展開なのかな？ なるほど、私はあのとき死んだのはてつきり望見ちゃんだと思ってたけど、綺麗な胸を切り裂かれて死んじゃったのは実は臨夢クンだったのか。ごめんごめん、顔が同じだから間違えちゃったよお」

（——！！）

激しい頭痛。わかっているくせに、彼女はあの大惨事を誰よりも理解しているくせに、それでも尚、自慢の真つ赤に染め上がっている髪を弄りながら、そんな良心の欠片もないことを言い放った。

激しい頭痛が訴える。

僕の、

『僕たち』の平和な日々を返してくれ、と。

「ひどいなあ。それじゃあまるで私があ的事件を引き起こしたみたいな言い方じゃない」

「……そうじゃないです。でも、あなたと出会わなければきっと僕たちはあんな世界を見ずに済んだと思うんです」

「ははは、確かにそれはそうだね。私たちみたいな世界の住人に出会うことがなければ、きっと『妖魔』なんていうお化けよりも珍しい存在に出くわすことはなかったのかもしれない。だって現に普通の人間はまず出会わないからね。だけどそれ故に少しでもそんな『世界』の裏側、はみ出しもの、異端、極端に関わってしまうと、それ以降それらに引き寄せられ易くなってしまう。うん。正解だ。それはきっと中学生までの数学の問題だったら花丸を貰える解答だよ」

「でも、世界は中学生程度が導き出せる数式、証明で説明できるほど甘くはないよね。そして、もちろん生まれたときから天才の名をほしいままにしてきた臨夢くんだってわかっているはずだろう」

「何をですか」

「ワンダーインリアルワールド。“日常の中の非日常”とまで言われたキミの妹」

それはいつの頃からか名付けられた、望見の二つ名だった。

「居ながらにして世界中の不思議を引き寄せる、特異性変質者誘引体質」

近所の茂みで新種のカエルを発見したことがあった。学校の登校中に連続婦女暴行犯に誘拐されたことがあった。神社の境内の下で大量に死んでいる猫を発見して、その数日後、猫の妖魔に襲われたことがあった。そしてそのとき、偶然通りかかった少女はとんでも

ない化け物だった。

「私と出会わなければ？ 妖魔と出会わなければ？ それは全くのお門違い」

わからないものはワクワクする。

未知への好奇心。

わからないものへの探究心。

非日常への羨望。

人間であれば誰しもが持っているその感覚を凝縮、洗練した形で所持していた妹。

不思議なものを集め、

間違ったもの引き寄せ、

存在するかも怪しいものを強引に表舞台に引っ張り上げる空前絶後の能力。

「そっこのはね、臨夢ケン」

——自業自得って言うんだよ

(……………)

怒りで血管が大小含めて十本単位でブチ切れた感覚がした。その所為か何度目かになる激しい頭痛に襲われ、加えて酸欠の所為で目の前がクラクラしていた。

「……三年」

「うん？」

「約三年。学校にも僕の前にも姿を見せなかったですけど、いったい今まで何をしていたんですか、姫？」

絶対的な死を目の前にしても尚、彼女の元へ飛びかかりそうになった僕は、何とか話題を変えることによって心を落ち着かせようとした。しかし、その質問の返答もとてもじゃないが僕の頭痛を治めてくれるような内容ではなかった。

「もちろん」

——世界と戦争を

聞いた僕が愚かだった。

「いやあ実は私の大好きな二番目のお兄ちゃんがちよつと世界に喧嘩を売っちゃったの。まあ大半は向こうの逆切れなんだけどね。それで、そのままお兄ちゃんに殺らせておくと地球上から私達家族以外の生物が全部消えちゃうから、しょうがなく代わりに、私とお姉ちゃんと……あとあのクソ兄貴で喧嘩してやったわけよ。それで大体三年かかったわ」

『ここ数年で世界経済が大分傾いてしまったのは私たちの所為なんだよ』と笑って言う彼女は、ミディアムショートの髪の毛を軽く振り払った。三年前も火の粉が飛んできそうなほど彼女の髪の毛は赤く燃え上がっていたが、それでもまだまばらに黒髪が残っていた。しかし、今は目に見える範囲全てが紅蓮で、さらに瞳の色も以前より赤みがかった茶色に大きく変化していた。

「まあこの三年間に起こったことはまた別の章か外伝で語るとして、さて、その戦争というか一方的な虐殺が終わったおかげでようやく私も日常に戻れることができました。いいねえ、楽しい楽しい平穏で平和な日常だよお」

テンションがさらに上がったのか、彼女は大きく足をバタつかせた。その所為で履いていた極端に短いスカート（学校指定）も捲れ上がり、少し斜めの位置にいた僕からもその中身が見えてしまった。

（——！！）

「と、前フリが長いのはいつものことだけど」

男なら目を逸らすのがエチケットなのだろうが、僕はあえて目を逸らさなかった。

真っ白な足に巻かれた黒いホルスター

僕はその内側に収められているものをこの目で何度も見たことがあったから。

「さて、臨夢クン——」

『平穏』『平和』と口にして、学校の制服にまで身を包んでいる

彼女の手の中には、すでに小振りのナイフが握られていた。僕はその存在を確認すると同時にすぐさま自分の位置を確認するが、すでに何もかもが手遅れだった。

初夏の日差しが降り注ぐ教室。

もちろん教室の床には、

僕の影がはつきりと映っていた。

「——いや、望見ちゃんは」

誰を殺してほしいんだったかな？

タンッ

床に刺さる、

影に刺さるナイフ。

——

影は自分の一部。

切っても切れない自分の半身。

（わ——）

それだけでも影だけの話だけではなく、

（わたしの——）

双子という存在もまた

自分の一部であり、

そして切っても切れない自分の半身である。

「私の願いはいつだってただ一つだけ！！ それはお兄ちゃんといつも共にあることだけよ！！ それ以外は何もいらないし、それを邪魔するものがあるならどんなものだって愛の名の下に殺してあげるわ……たとえば、それがアナタだとしてもね！！」

第七話 再会編 因縁（後書き）

試行錯誤が続きますが、よろしく願いします。

第八話 解説編（前書き）

森羅万象理由はなし。

解説に理由は必要なし。

第八話 解説編

第八話 解説編

——アタラシイセカイハドウダイ？

その問いに僕は、

『僕たち』は——答えなかった。

答えられなかった。

けれど、その代わりに

「——お、にい、ちゃん？」

前触れなど何一つなく

予測など微塵もなく

不意に

不慮に

その言葉が僕の耳に届いた。

「の、ぞみ？」

ありえないとわかっていても僕はその名を口にした。

だってこの世で僕のことを『お兄ちゃん』と呼ぶのは、妹である望見だけだったから。

「——お兄ちゃん」

二度目の声。

今度はさつきよりもはつきりと、そして確実に僕を呼ぶ声が聞こえた。

ありえない——とは、今度は思わなかった。

何故なら、

その名を口にしたのは、紛れもなく自分だったと気付いたからだ

つ
た。

そして、

次の瞬間、

[illegible]

[illegible]

アア啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞啞
啞啞啞啞!!!」

どこからともなく湧いてきた……いや、流入してきた激情が僕の脳内を駆け巡り、同時に血管と神経が焼ききれたかと思うくらいの激痛が全身を駆け巡った。

痛い痛い痛い痛い。

熱い熱い熱い熱い熱い熱い。

苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい。

辛い辛い辛い辛い辛い。

なんだよこれは。

なんなんだよこれは！！

「約400年前の西欧。正しい世界も間違つた世界も総じて混沌としていたあの時代においても群を抜いてイカれていると恐れられた女、“愛染明王”ことシルヴィア・ローゼンクロイツ。愛に染まり、愛に溺れ、愛に生き、愛に死に、愛のために数十万という人間を殺した自称愛術学者、通称デッドサイエンティストによって書かれた著書『完全愛』。その第二章『心身合一』愛する者と真の意味で一つになる方法』」に記された『合一するための五箇条』」

望見の死体に覆い被さりながら引き裂かれるような痛みに悶える僕とは裏腹に、赤い存在の彼女は薄ら寒い笑顔を浮かべながら実に楽しそうに語った。そして語りながら持っていた薄い刃のナイフを

振り回し、周りに溢れる瓦礫の山の影を出鱈目に切り取った。

彼女に影を、半身を、概念を切り取られた瓦礫は、その存在する意味と意義を殺され砂塵と化していく。

赤石姫士。

赤い色紙。

赤紙配達人。

ヘルプリンガー。

魔を刺し、影を刺す。

生命の死ではなく存在の死をもたらす“概念殺し”こそ、彼女がそう恐れられる所以だった。

「『1、十五歳未満であること』……まあ、これは精神、身体共に未熟な方がいいってことなのかな？」

ちなみに僕たちは先月十二歳になったばかりだった。

「『2、お互いを心の底から愛していなければならない』……うふ、この辺までだったら私とお兄ちゃんも条件に適合してるんだけどなあ」

確かに僕は妹を、望見のことを心の底から愛していたし、

望見に至っては言わずもがなだった。

「『3、二人は必ず双子でなくてはならない』……うんうん。身体が魂の器だという前提ならば、確かに近似の器に魂を移し替えたり注入したりすることは可能性としては十分考えられるかもしれない。特にキミ達は姿形がそっくりだからね」

——どうしてお兄ちゃんはお兄ちゃんなのに、二卵性なのに私と瓜二つの姿をしているのだろう

その言葉は他でもない望見の言葉だった。

「『4、粘膜接触による相手の殺害』……この辺りからシルヴィアⅡローゼンクロイツという人間の悪魔的とも言える残虐性が見えてくるよね。粘膜接触による相手の殺害。ポイントは粘膜接触を『しながら』というところじゃないことだよ。まあ、シルヴィアがここで言う粘膜接触というのももちろん一にも二にも性行為のことを示しているわけだけど、それは巷で囁かれているスナッフムービーなんかのグロさ、残虐性とは比較にならないよ。だって直接的な死因が性交渉に依るものにするなんて……ねえ、あのデッドサイエンティストの実験台にさせられた数万の双子たちは、一体どれだけ残虐で非人道的で、凄惨なセックスを強要されたんだと思う？ 子宮を突き破られ、未成熟な骨盤を完膚なきまで粉碎された子女。行為の途中で陰茎をまつぶたつに折られたり、最終的には妹の小腸を巻きつけて己の逸物を扱かなければならなかった少年。その他にも『完全愛』の中には、それはそれは目にするだけで汚物を散らし想像するだけで精神がイカれてしまうような記述がわんさかされているけど、それを考えるとキミ達愛沢兄妹の口唇による窒息死というのは、まあなんとロマンティックなことでしょう。ところで、蛇足のようだけれど一応何故『粘膜接触による相手の殺害』かというところ、これまた行為のイカレ具合とは裏腹に実に理路整然としていて、『粘膜に

置ける接触がどの方法よりも魂を移行、吸収、定着させやすい」ということだそうだ。ははは、魂を栄養や座薬と同列に扱っているのがどうにもこうにも滑稽に思えるけれど、基本的に粘膜というのはそういう役目を負っているからね、わからない話ではないでしょ」

わかるはずがなかった。

そして僕たちのあの行為を、そんな下衆な儀式と一緒にしてほしくなかった。

「『5、愛する者の血肉を摂取しなければならない』……博学多識な臨夢クンなら知っているとは思うけれど、死者の血肉を体内に収め、その者との融合を図ろうとすることは表裏問わず昔から数多く為されてきたことだよ。そして、偶然にもキミはキスをしながら望見ちゃんの血を飲み干した」

確かに社会的なカニバリズムについての文献はいくつか目を通したことはあった。しかし、それはあくまでも食人が行われていた記録であって、そんなふざけたことが実際に起こり得るなど――

「キミはここまで来てまだそんなことを言っているのかい？」

燃えさかる炎。渦巻く業火。天焦がす炎柱。ヘルブリンガーと呼ばれる彼女は話をしながらもその不定形で揺らめく影を片っ端から切り取り、僕たちの住み慣れた街並みを灰燼舞い散る地獄へと変貌させていく。

いとも簡単に。

むしろ当然のように。

驚くほど躊躇いなく。

もちろん思い出も思い入れもあつた世界が目の前でまた一つ、また一つと無意味で無意義で無意思な砂塵に変えられていくのは、全てを理論的に捉えていく僕であつても悲しみと喪失感を感じずにはいられなかったが、しかしだからといって今の僕にはどうすることもできなかった。

「いやあ、しかし実際のところ私は驚いているんだよ。シルヴィアⅡローゼンクロイツは変人として有名で、殺人鬼としては超一流の人物だったけれど、彼女の『完全愛』なんていう著書の名を聞いたことがあつて、しかもそれを読んだことがあるのは、おそらく私を含めて世界に三人もいれば良い方だろう。それを、そんなマイナー中のマイナー、秘中の秘である裏側の書物に書かれている内容を、偶然とはいえキミ達はやり遂げてしまった」

「そ、そんなこと……」

「なーんて、そんなことは別に驚きでも何でもないんだけどね！！」

興が乗ってきた彼女は口が裂けてしまふかと見間違えてしまふほどの笑顔で高らかにそう吠え、握っていた二振りのナイフを自分の影にストンツと落とした。落としたナイフは底なし沼に吸い込まれていくようにズブズブと沈んで消えた。そして、自分の愛刀が無事仕舞われたことを確認した彼女は、再度開いた無手を宙空に掲げそこにあつた『何か』を掴むと、

「だらあああああしやあああああああ！！！！」

地軸がブレるかと感じるくらいの馬鹿力で引っ張つた。すると、半径200メートル以内にある僕と望見の死体以外の構造物、生物

が空に舞い上がった。

「キヤハハハハ！　一流でもなければ超一流でもないその存在は、流れることを知らない遥かなる高み　“零流”。間違った世界において200年間空白だった母家——全ての先頭にして何者にも不可侵の『あ』の字を埋めたその名は“血塗られた赤き家族”の『赤石』。『人間』という種の終わり、そしてそれを越えた新たな存在への可能性である“終わりの始祖”。そんな空前絶後の存在であり且つ、プリチーな私が事件の核心に触れることなく、ただの解説役と後始末に甘んじなければいけないこの状況！！　やだなあやだなあやだなあ、こんなご都合主義、何でもかんでも偶然とか奇跡と言えば許されると思ってるのかな！！　それとも——」

——それとも、こんなご都合主義も『ワンダーインリアルワールド』の能力だと言うのかな？

笑みが消え、

視線が死線と化し、

彼女は、

ヘルブリンガーと呼ばれる化け物が、

このとき初めて、

僕たちを、

同類を見るような目で見た。

[illegible]

[illegible]

じゃないけど出来そうにないな……ま、そもそもそんな化け物のような想いを誰かに向けようなんてことは常人なら普通躊躇うだろうけどね」

——私たちが長い歴史が作り出した人為的、意図的な化け物だとしたら、

——望見ちゃんは間違いなく天然の化け物だよ。

痛みに悶える僕は、

頭に流入してきた執着心、依存心、独占欲、支配欲、狂気、狂喜を感じた僕は、

やはりその言葉に何も返すことができなかった。

「さて、臨夢クン。恋と愛に痛みは付きもの、いや、憑き物なのは私も重々理解しているところで、キミが只今その痛みで絶賛悶絶中なのも火を見るよりも明らかだけれど、話を……戻しても何がどうなるわけでもないからそろそろ話を進めようか」

影、概念を引っ張られ宙に舞い上がった物体は、吸い寄せられるように一つに集まっていき、最終的には百メートルを優に超える球体となった。そのあまりの質量が空に浮かぶ月を覆い隠した所為で、僕たちは月明かりが照らし出すその大きな球体の影にすっぽりと埋まってしまった。そして、彼女は何の躊躇もすることなく自分の足元に出来た球体の影に腕を突っ込み、

「想いの大きさ、歴史の深さ、存在の大切さ。アナタたちがそれぞれ抱えるものは痛いほど伝わってくるけれど——」

——それを摘むのもまた一興

空でパン、と弾けるような音がなつた瞬間、

僕の生まれ育つた家を中心とした半径200メートルは、

今後百年は草木の生えることのない不毛の砂漠と化した。

どれくらいの時間が経つただろうか。

周りはまだ暗いが、近くに赤い彼女はもういない。

時折吹く生暖かい夜風が、辺りに降り積もった灰のような白い砂を舞い上げる。

舞い上がった無意味な結晶は再度降り注ぎ、僕と望見の死体に降りかかる。

その度に僕は優しく彼女の体から白い砂を振り払った。

何度も。

何度も。

何度も。

しかし、何度振り払おうとも、去り際の彼女の言葉は消えなかった。

……

……

「うーん、どうやらさすがの愛沢兄妹でも、さすがの『ワンダーインリアルワールド』でも無理みたいだね」

倒れている僕を見下ろす赤石姫士。

ひどくガツカリした顔だった。

いつも素敵で不敵で、やっぱりどこか不適な笑顔を浮かべている彼女には似合わない、心底残念そうな顔だった。

「これは『完全愛』にも書いてあることだし、今の臨夢クンの状況を見れば一目でわかることだけれど、この秘術というか禁術」

成功例が一つもないんだよ。

彼女は先程影に仕舞った二本のナイフの内の一本を再度取り出して、それをぼとり、と地面に落とした。

今度は沈んではいかなかった。

「そもそも無茶苦茶なんだよ。二重人格ならまだしも二重魂なんてどう考えたって神経回路が焼き切れてしまつに決まっているだろ。例えば、一つの魂が右に行きたいと入力して、もう一つに魂が同時に左に行くという入力を身体にしたら、たちまち肉体が破裂するだろうね。事実、シルヴィアの実験で運良く……否、運悪く魂の定着に成功した七組の双子は、その後五分以内に脳漿をぶちまけて死んでるんだ。シルヴィアはそれを『問題は身体への魂の定着率ではなく、魂と魂の同期率だ』とか訳の分からないことを言つて、五箇条の内の特に最後の五番目を重要視していたみたいだけれど……まあ簡単にいえば所詮双子だつて魂は他人だった、ということだね」

それでもキミ達兄妹ならなんとかすると思つたのに、と彼女はいつもと変わらない過大評価を僕たちに押し付けた。

「今は望見ちゃんの魂がほとんど眠っている状態だから問題はないだろう。でも、それもあと一時間もすれば終わりだ」

彼女の魂が目を覚ました瞬間、キミ達の人生は終わるよ。

……

……

「ああ、僕の人生ってどうしてこんなに上手くないのかな」

泣きながら僕は人類最強のお姫様が残っていたナイフを握り締めていた。

彼女は言った。

——魂がまだ定着していない今の状態なら、臨夢くんだけ助かる方法はある。

それはとても単純な方法だった。

ただ吐けばいい。

そう、

僕が飲み干した望見の血液を体外に排出すれば、それで全ては終わると彼女は言った。

ただ、

「そんなことできるはずないじゃないか……」

愛する者の血。愛する者が生きていた証。僕が奪った純血。

それを、

そんなに大切なものを自分の命を助けたいがために吐瀉物として吐き出せるわけないじゃないか。

そんな望見を冒瀆するような真似を、兄である僕ができるはずないじゃないか！！

——言うと思ったよ、妹バカ。じゃあ、そのまま死ねばいいよ。友達想いの私は、望見ちゃんの『所為』で脳漿を飛び散らせて死ぬのか、それとも自分の意思で命を絶つのかを選択させてあげましよう。

月光を浴びて煌めく刃。

その刃に映った泣き顔は、

紛れも無く我が妹の顔だった。

「ごめんよ、望見。不甲斐ないお兄ちゃんでごめんよ、望見。僕は結局何もお前のためにしてやれなかった。覚悟をもってお前とキスをしたことも、そしてそのキスでお前を殺したことも、結局全ては無駄な出来事……いや、それどころかお前の魂を弄ぶことになって、しかも極めつけはお前に僕を殺させるような事態にまでなっちゃったよ」

ぶちゅり、と

肉を切り裂く感覚。

この日、

僕は、

何度目かの地獄を体験することになった。

第八話 解説編（後書き）

終わりはまだまだ見えませんが、それでもコツコツと進めていきますのでよろしくお願いいたします。

第九話 再会編 因子？（前書き）

愛してる。

愛捨てる。

愛とは愛以外を捨てることに他ならない。

第九話 再会編 因子？

「赤石姫士。人類最強のお姫様。どうして私が生きていること……元い、私の魂がこの場にあることがわかったのかな？」

三年前のあの記憶から無理やり思考を引き戻した僕……ではなく、僕の身体を使った、望見はそう質問した。

「あのとき、アナタは私たちを見てダメだと言って去っていった。それからアナタとは一度も会ってはいなかったし、私たちだってこのことを他の誰かにバラすようなことはしなかった。この平穩に、この幸せに、他人の横槍を入れさせるような隙を私とお兄ちゃんが見せるはずがなかった。それなのに何故アナタが、よりもよって『ヘルプリンガー』の赤石姫士がその事実を把握していたのかしら」

望見は率直な疑問を、本当に忌々しそうな顔をしながら彼女にぶつけた。その顔は自分（この場合この表現が正しいのかはわからないが）でもわかるくらい眉間にシワが寄っていた。僕としてはシワが残ってしまうと困るので、いくら望見とはいえそんな顔をしてほしくはないのだけれど、だからといって今のこの状況——望見の魂が表に出ているこの状態で僕に出来ることなどあるはずもなく、ただ僕は己の身体の内成り行きを見守ることしかできなかった。

「事実を把握？ やだなあ、そんなわけあるはずがないじゃないか。いくら私が週刊誌とレディコミと三流ミステリ小説好きの情報通だからといって、何でも知っているわけじゃないんだよ」

「でも、実際アナタは私の存在を知っていた」
「それは私に対する過大評価がもたらした認識のミスだね」

——私は知っていたわけじゃない。

——この場に現れて、

——ただ初めて『確認』しただけだよ。

彼女がそう眩き、気分よさそうに微笑むと床に刺さったナイフがドブツ、と音を立てて影に沈んだ。すると、その消えたはずのナイフが今度は教室の天井から彼女の元へと降り注いだ。それを彼女は履いていたスカートを大きく捲り上げると、特に意識を向けることなく太腿に巻き付けられた黒いホルスターへ絶妙な足さばきでダイレクトに収めた。

「私は“概念殺し”の『ヘルブリンガー』である以上に“概念遣い”の赤石姫土なの。概念を操り、概念を屈服させ、概念の生殺与奪を司るその私が、魂なんていう概念の塊のようなものをまさか見逃すはずがないじゃないの」

クッククク、と如何にも悪役がしそうな邪悪な笑いを浮かべながら、身振り手振りを加えて大げさに解説をするお姫様。いつだったか、彼女は自分が解説役になることにひどく気分を害していたような記憶があるのだが、しかし、どうだろう。今の彼女は彼女が愛して止まない三流ミステリ小説に登場する最初から何でも知っている名探偵のように、饒舌に、そして楽しそうに推理でもなんでもないただの事実をノリノリで語っている。まったく、彼女の気まぐれさというか自由放埒さには本当、筆舌し難いものがある。そして、その件については妹の望見も同意見なのか、さっきまでイラついてい

た彼女は今はうんざりともげんなりとも表現できるような顔をしながら、意気揚々と話し続けるお姫様の話を相槌も打たずに無言で聞いていた。

「——でね、この私の能力にかかれば、あのクソ兄貴『クロノジャーパー』のイヤらしい“漆黒の拳”なんて目じゃ——」

「もう、いいわ、赤石姫士。アナタに事の説明を頼んだ私が愚かだったわ」

「うん？ まだ私の『クソ兄貴を葬るための十の計画』の話は途中なんだけど」

「殆ど内容は聞いていなかったけれど、何で話がそんな方にズレているのよ。というか、アナタは私と一緒にでお兄ちゃんが好きという設定じゃなかったの？」

「あれは二番目のお兄ちゃんの話よ。長男の赤石翔については私はいつだって殺したくてウズウズしてるんだから」

「そう、意外とアナタたち兄妹って複雑なのね」

「いやいや——」

——キミ達愛沢兄妹に比べれば私たち兄妹など物語として語る価値すらない平々凡々な存在だよ。

「——！？」

（——！？）

突如後方から聞こえる声。

目を離したつもりはないし、

意識を切らすなどという愚行をした覚えもなかった。

しかし、僕も望見も気づいたときには窓枠に彼女の姿はなく、いつの間にか彼女は教室の僕の席に座っていた。

何故か伊達メガネをかけながら。

「……何のつもりかしら」

意図が掴めていない僕に代わり、望見が彼女に向かって声をかけた。彼女はその問いかけにはすぐに答えず、一度右手で黒縁メガネをクイツと調節すると、胸ポケットから小さなメモ帳とジャラジャラとキーホルダーが付いたシャープペンを取り出して、まるで普通の学生がこれから授業でも受けるかのような体勢を取った。

「さあ、どうぞ」

「だから何のつもりかしらと聞いているのだけれど」

「私からの説明はもういいんでしょう？　だったら今度は私がアナタ達から話を聞く番じゃないかな？」

「ああ、そういうことね。でも、残念だけど人類最強のお姫様に私たちがお話することはないと思うわよ」

「キミの自分に対する過小評価と臨夢クンの私に対する過大評価は全く困ったものだね。そんな卑下と畏怖に塗れた関係じゃとてもじゃないが健全な友好関係は結べないよ。それにさっき言ったばかりじゃないか。私だって何でも知っているわけじゃないって」

まあ、知らないものを無理矢理擦じ伏せて断定してしまう力はあるけどね、と残像が出来るほどの高速でペン回しをしながら器用にウイंकをする彼女に対して、疲れたように望見は小さく溜息を吐いた。まあ無理もないと思う。普段表に出て話すことのない彼女が、久しぶりに会話をする相手があの人類最強のお姫様こと赤石姫土なのだ。常に気を張って、隙を見せないようにいつもとはまるで違う

強い口調で喋るのは、心優しい望見にとっては相当精神的にキツイはずだった。

本当なら今すぐにでも僕が代わって表に出てやりたかった。

しかし、

「過小と過大の評価については少し首を傾げるところがあるし、アナタとの友好関係の件については首がプレシオサウルス並にひしゃげるところではあるけれど……まあ、いいでしょう。で、そんな奇天烈な格好をしてまでアナタは私たちに何が聞きたいのかしら」

望見は絶対に譲らない。

魂だけになってしまった自分がそれでも唯一手に入れることのできた僕との平穏な日常。

その幸せをかき乱すような因子を、

望見が絶対に見過ごすはズがないのだ。

「もちろん私が知りたいことはただ一つ——『ワンダーインリアルワールド』。そう、キミが今もここに平然と存在できる理由だよ」

シャープペンをしっかりと握んだお姫様は、そのペン先でビシッと望見を指した。

——うーん、どうやらさすがの愛沢兄妹でも、さすがの『ワンダ

『インリアルワールド』でも無理みたいだね。

そう断言したのは他ならぬ彼女であった。

——そもそも無茶苦茶なんだよ。二重人格ならまだしも二重魂なんてどう考えたって神経回路が焼き切れてしまうに決まっているだろ。

現にシルヴィア「ローゼンクロイツの禁術は成功例ゼロのイカれた実験だった。

——今は望見ちゃんの魂がほとんど眠っている状態だから問題はないだろう。でも、それもあと一時間もすれば終わりだ。

事実、夢心地の望見の意識が流れ込むだけで僕の肉体と精神は崩壊しかかった。

——彼女の魂が目を覚ました瞬間、キミ達の人生は終わるよ。

しかし、僕たちの人生は終わるところかあの日から新たに始まっていた。

「それはやっぱりキミのその能力の力なのかな？」

その問いに、

僕の妹は、

[illegible]

—なんだ、そんなこと？

彼女のお株を奪うが如く、純然に笑った。

そして、

「そんなのお兄ちゃんの愛の力に決まっているじゃないの」

彼女は人類最強のお姫様にも怯むことなく、誇りを持ってただそう語った。

望見は——譲らない。

望見は——譲れない。

だって彼女は譲るものを持っていないから。

すでに彼女はあまりも失ってしまっていたから。

それならば僕が譲ろう。

それならば僕が与えよう。

だって僕は望見のお兄ちゃんなのだから。

だって望見は僕の愛する人なのだから。

そう……愛。

愛とは、愛する人に自分を捧げること。

「——まさか!？」

何度も言おう。

望見は譲らない。

僕が捧げた愛を絶対に譲ることはしない。

それ故に、

「自分の魂と身体を妹に捧げるなんて正気かい、臨夢くん？」

彼女が望まない限り、

僕は表に出られないのだ。

第九話 再会編 因子？（後書き）

さらにスピードを落として執筆中です。ただ決して止まることはな
いと思いますので、今後ともよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5859u/>

妹魂【シスコン】～目に入れたらきつと痛いけれどそれでも食べちゃいたい

2011年12月18日13時55分発行